博士が東洋史學の研究に從事せられるやうになつたのは、明治二十三年大學を卒業して學習院教授に任ぜられ、間もなくそこに設けられた東洋諸國史を擔當せられるやうになつてからのことであると屢々博士の追想談に於て聞かされたことである。當時は前述のやうにまだ我が國に於ける斯學の草創時代であつたので、これが研究には嫌應なしに先づ以て西儒の學說に通ずる外はなかつたのである。ところでこの學問に於ける西儒の特色は、廣く東洋諸民族の言語に通じ、その史料を利用すると共に、別にこの知識を以て支那の記錄に見える所關の記事を解釋し、參酌對照して問題の解決に資する點にあつた。かゝる學風が此の如くにして東洋史の研究に進まれることになつた博士の學問に影響を及ぼすことになるのは當然のことであつて、東洋諸民族の言語の研究と利用とが、博士の學問の大なる部分を占めるに至つたのは、その由來するところこゝにありと言はねばなるまい。此の如くにして西儒の用ゐた方法を以て東洋諸國史の研究に進まれる間に、僅々數年にして早くも獨自の見解を立て、世界の東洋學界に重要なる地歩を占める基礎を固められ、遂に明治三十二年には前にも述べた獨文の匈奴及び東胡民族考を羅馬の萬國東洋學會に提出し、ついで同三十五年には歐洲留學中、ハムブルグの同學會に於て自から獨文烏孫考を朗讀して重ねて聲譽を博せられることになつたのは周知の事である。

この頃から以後その生涯を通じて續々發表せられた幾多の研究や、また講義の內容などについて細かに述べることはこの短篇の目的ではない。たゞこれ等を通じて看取し得る特徵として、その所論が常に言語の上に大なる關聯を有すること、その論述に於て驚嘆すべき推理の透徹が、輝かしくも發揮せられて居ることとを特に擧げておく